2011 年 7 月 26 日放送

漢方医人列伝 「矢数道明」

東京医科大学病院　麻酔科　講師　　矢数　芳英

矢数道明は、大塚敬節先生、細野史郎先生らとともに、戦前、戦後を通じて、漢方復興の活動を精力的に続け、その生涯を遂(と)げました。本日は、矢数道明がどのようなビジョンを持ち、それを成し遂げようとしていたのかについてお話したいと思います。

まずは、矢数道明の生い立ちからお話致します。

10 人兄弟の 4 男、四郎として 1905 年 12 月 7 日、茨城県那珂郡大宮町に生まれました。満 11 歳で父を失ったため、少しでも早く就職せねばならず、水戸商業学校に進みました。そして卒業後、すぐに代用教員を勤めていました。

その 2 年後に、兄より声がかかりました。その兄というのは、長兄の矢数格です。格は、現在の千葉大学医学部である千葉医学専門学校を卒業して、森道伯先生について、漢方を修めていました。格の懇請により、道明は医学を志すことになります。

そして、1925 年に、現在の東京医科大学である、東京医学専門学校に入学しました。この頃より、東京、下谷の一貫堂に通うようになり、恩師である森道伯先生に漢方を学ぶようになりました。そして、1930 年に東京医専を卒業し、医師となり、あらためて、一貫堂に勤務するようになりました。1931 年に恩師・森道伯先生が逝去され、この年より「道明」

と号すようになりました。1933 年に東京の四谷区箪笥町にて、漢方温知堂医院を開業しました。

次に、海外にも目を向けていた、戦前の漢方復興活動について、お話致します。

1935 年、古方派の大塚敬節先生、折衷派の木村長久先生、後世派の矢数道明と、弟の矢数有道、薬学の清水藤太郎先生、鍼灸の柳谷素霊先生、医史学の石原保秀先生の 7 人で偕行学苑を設立しました。以前は各派の足並みが揃わなかったため、二代目を中心に大同団結したもので、流派の問題が解消される礎となりました。このとき道明は、まだ 30 歳という若さでしたが、その志の高さがうかがえます。

偕行学苑は 1936 年より漢方医学講習会を開講し、1949 年まで続きました。約 900 名におよぶ受講者からは、のちの漢方界や針灸界の要人が出ています。

これを契機に偕行学苑を母体とし、中国の葉橘泉先生、張継有先生、楊医亜先生と連携し、東アジア伝統医学の振興を目的に東亜医学協会を結成しました。当協会は現在に続いております。

その機関誌『東亜医学』は 1939 年に創刊されました。その後、1941 年、戦時下のために『漢方と漢薬』誌と合併 したものの、1954 年に『漢方の臨床』誌として復刊され、2012 年には第 59 巻を迎えております。

また、海外における中国医学の存続にも力を注いでおりました。1940 年、道明は龍野一雄先生と共に訪中し、満州国民生部の会議にて岡西為人先生と共に、中医学と中医師の存続・発展策を建言し、みごとに採択されました。

その後、1941 年に軍医として徴兵されましたが、終戦後の 1946 年に帰国し、再び診療に従事することになりました。

最後に、戦後における漢方の復興活動についてお話致します。

1950 年、道明は同志と共に日本東洋医学会を創立しました。当時 100 人未満だった会員は、現在 8、000 人を超え、1991 年には日本医学会への加盟が承認されました。

1954 年には東亜医学協会を再発足させ、1959 年には日本東洋医学会理事長に就任し、同学会の 10 周年記念事業を担当しました。1968 年に日本東洋医学会総会会長に就任し、創立 20 周年記念総会を主宰しました。

1972 年、北里研究所附属東洋医学総合研究所顧問に就任し、同所で診療を担当しました。1980 年、大塚敬節先生のご逝去により、同所長に就任しました。このときすでに 75 歳になっています。そして、1983 年に同所に医史学研究室を設置し、小曽戸洋先生、真柳誠先生らとともに医史学の調査・研究にも力を入れていました。同研究室は、1992 年 12 月より医史学研究部に昇格しました。

1984 年には『近世漢方医学書集成』全 4 期 116 巻の出版が完了しました。当叢書は 1979 年から大塚敬節先生と道明が編集を続けてきたもので、二人の蔵書を中心に、室町から明

治前期までの漢方書原本 170 種以上が鮮明に影印されており、漢方の伝統を現代に蘇らせた画期的な出版でした。以後、当出版により漢方研究が著しく向上しました。

1986 年、北里東医研が日本初の WHO 伝統医学研究協力センターに指定され、同センター長を兼任しました。同年 7 月に北里東医研所長を、在任 5 年 10 ヵ月にして退任し、その退職金を日本医史学会に寄贈しました。これを基金として同学会に矢数医史学賞が設置されました。このように医史学へも大変力を入れておりました。それは道明が、「漢方の基礎医学は医史学である」と考えていたからです。

以降も、漢方復興に精力的な活動を続けるとともに、2001 年の 95 歳まで外来診療を行っておりました。そして 2002 年 10 月 21 日老衰のため亡くなりました。享年、満 96 歳でした。

このように、若い頃より精力的な活動をはじめ、高齢になっても休むことなくそれを継続できた「力の源」はどこにあったのかを考えると、それは「長期的なビジョン」を持っていたからに他なりません。

かつて、道明が「漢方復興の目標」としていたのは次の 4 つの項目です。

① 日本医学会加盟

② 漢方科標榜

③ 国立東洋医学研究所創設（これは国家がサポートする研究所を指します。）

④ 統一教科書制定（これは中国の統一教科書を凌ぐ教科書の編纂です。）

先程お話ししたとおり、一つ目の目標である、日本医学会への加盟は、1991 年に達成されました。二つ目の「漢方科」の標榜も 2008 年 4 月 1 日より、診療科目の組み合わせにより、ようやく可能になりました。この他に、海外交流も大変、重視しており、東アジア伝統医学の提携も漢方振興のひとつの目的としていました。

このような「明確な目標」があったからこそ、道明は高齢となっても漢方の復興に力を注ぎ続けられたのだと思います。

それでは、これからわれわれは、どのように伝統医学に取り組んでいったらよいのでしょうか？

1993 年に、『中医臨床』誌で、平馬直樹先生と道明が行った対談に、その答えのヒントがあるように思いますので、ご紹介させていただきます。以下、道明の言葉を抜粋します。

「今後の日本のあるべき立場を、私はいつも考えているのですが、ちょうど日本に西洋医学が入ってきて、ドイツ医学に切り換えるとき、漢方医からいろいろな意見が出ました。浅田宗伯の“和胆洋器”の説、浅井国幹の“実測究形論”など、いろいろありました。浅田宗伯も浅井国幹も和魂洋才でした。つまり、“魂は日本、材料として西洋の知識を取り入れる”というものです」

「私は現在の状況からいえば、本間棗軒の説が最も妥当であるように思います。つまり、“日本が各国の文化を統一する”というものです。日本は春夏秋冬の四季に恵まれ、東西南北における様々な思想や、いろいろな文化を取り入れ、新しく発展させることのできる

恵まれた環境と伝統・文化を持っていると思われます」

「本間棗軒の『内科秘録』の巻頭に出ている言葉が適切だと思います。それは、“わが主張するところまた活物窮理”というものです。とにかく、人間を生かすことが一番の結論だというのです。そして、“軒岐を尚んで、いまだ必ずしも悉く、その書を信ぜず”といっています。軒岐というのは中国の黄帝の学問のことですが、この学問は非常に尊いものだが、これを全部“信じる”のではなく、これを“取り入れる”のだといっています。あの当時、盛んにオランダ医学が入ってきて、日本の漢方医はこれを蛮貊と言い、蛮人の医学と言っていました。しかし“蛮貊を悪んで、いまだ必ずしも、悉くその術を排せず”、つまり、その良いところを取り入れるのだといいます」

「さらに、“博くこれを五大州中に採り、日に試み、月に験し、一にもって、活人に帰す。これ神州の医道のみ”と。この立場が日本の伝統医学の立脚点で、この立場から、中医学も西洋医学もとりいれて、人間を生かす道に統一して発展させなくてはいけないと言っています。流動的に所に応じてこれを活かしてゆくべきだということです。われわれとしては、日本の漢方医学の歴史をよく踏まえながら、医学のいろいろの粋を活かしてゆくべきだと思います」

以上、抜粋でした。

最後に、道明の晩年のお話をさせていただきます。

晩年、95 歳で外来診療を行っている時に、道明が心残りだと言って、とても残念がっていたことがあります。それは流派の問題です。約 80 年前にさかのぼって考えてみると、師匠達の仲が悪く、協力しあわないために、漢方がますます衰退の一途をたどっている状況がありました。道明達は、この流れをなんとか変えたいと思って、1935 年、偕行学苑を設立したわけです。

これは流派の壁を超えて一致団結した、画期的な試みでした。以来、復興を重ねるごとに、この絆は強くなっていきました。しかしその後、復興が進むにつれ、この「生きるか死ぬか」の状況で団結した思いは次第に薄れていき、世代が変わり、再び確執が出るようになりました。

道明はこう言っていました。「日本には、古方でも、後世方でも、中医学でも、いかなる流派にも素晴しい先生達が沢山いる。しかしお互いが協力しあわなくては、いずれ衰退に向かってしまう」と。

これを遺言として心にとめておき、これからは「壁を超える」にはどうしたらよいかを、考えていかなければならないと思います。

以上、矢数道明についてお話しさせていただきました。